

第6回和光鶴川小学校「基調報告」

子どもとともにつくる授業

行田稔彦

1、はじめに

和光鶴川小学校は開校7年目を迎えました。今年度は、完成した学校としての新しい出発の年でした。

今まで6年間は、毎年、初めて挑戦する課題がありました。たとえば、昨年度だけでも、「初めて6年生のいる学校としての運動会・夏合宿・秋祭り・歌の会などの行事の創造」、「完成校記念誌、校歌・校旗など完成校に伴う諸企画事業」など全校全職員が無から有を創る課題が目白押しでした。鶴小初の第1回卒業式を創り上げる過程では、それぞれのイメージを重ね合わせました。鶴小で勤め始めた若い教師たちには、教師として創る卒業式を全く経験したことがないので、全体のイメージづくりが特に大切でした。途中でイメージ転換も柔軟に行われました。結果的には、卒業生が中央花道を通り参加者全員の真ん中で卒業証書を手にするという鶴小独自の形態が作り出されていきました。・・・こんな自由さ、柔軟さ、が鶴小の学校づくりの大きな特徴であり、今の姿を創ってきました。

公開研究会も、鶴小の2年目から始めました。学校を外に開くことで、私たち自身の力量を高めたいという願いからです。第1回公開研は大雪の中でした。156人の児童しかない学校に、250人を超える先生方が全国から集まってくださいました。私たちへの大きな励ましとなりました。その後、5回の公開研は、鶴小の学校づくりの課題とともに研究テーマを設定してきました。この間、「幼児期から低学年期の教育」、「少年少女期の教育」など子ども研究を土台においた教育実践のあり方を追求してきました。

「無から有を創る」課題は、物事の創造にはいつもつきまとうことですが、今までの鶴小は、『無』から『有』の課題がいつも目に見える形でありました。しかし、完成校となった今年は、過去6年間と同じように『課題』が目に見える形で存在していたわけではありません。今までの到達に立って、自分たちの足下から課題を掴み実践を創造するという、いわば、普通の学校と同じ位置に立ったわけです。

私たちは、今年の研究の重点を「授業づくり」としました。それは、昨年公開研で、参加者から教室の子どもの姿について率直な指摘を受けたことが大きく影響しています。学校全体の教育力で子どもたちがのびのびと育てていたとしても、授業の中で子どもたちが輝いて見えないとしたら、それは、私たち自身の望むところではありません。一人ひとりの教師の、1時間1時間の授業を検討しあうことで、お互いの力量を高めようとしてきました。そのことが、結果的には子どもたちの真の安定を教室につくり出し、父母の信頼

を強めることにつながると考えたのです。

こうした視点から、次の2つを課題として研究を積み重ねてきました。

教科書の「総合的な学習」を全面的に検討・批判しつつ、「私たちの総合学習」を豊かに展開していく。子どもたちが真に学びたがっていることは何か、そして子どもたちはどのように学びたがっているかという、私たちが今まで追求してきた「子ども主体の学びの改革」という視点に立って、子どもたちにとって学びがいのある授業実践に取り組む。

2、鶴小の子どもたちとこれからの教育

(1)今、子どもたちは

学級崩壊

1998年11月15日付朝日新聞は、2面全部使って「学級崩壊」「小学校なぜ荒れる」を特集しました。過去に、これほど紙面をさかれた「教育問題」があったでしょうか。担任に対する反抗や、私語、たち歩きが高じ、授業が成り立たない、学級活動もままならないクラスが増しているということです。首都圏のある市（人口40万人で30数校の小学校）の教師たちの調査によると、授業が成り立たないで親が動き出した学校が一つでもある学校は3分の2以上に及んでいたそうです。

不登校の小学生も増加の一途をたどっています。文部省調査によると、年間30日以上欠席した子は1997年度2万人を越えています。

子どもたちは、今「イライラ」「むかつき」ながら生活しています。超ムカ、MK5（マジで切れる5秒前）などの言葉にも現れているように状況は深刻さを増しています。NHK世論調査でも「しょっちゅうムカついている」「毎日のようにムカついている」で12%、「1週間に何回かムカつく」「時々ムカつく」で59%、合計すると71%です。子どもたちは何をいやがっているのでしょうか。東京都が、小学校5年生に、「学校生活でいやなこと」を調べたところ、「勉強がつまらない」子が25%、「勉強がわからない」と答えた子が15%、「先生が気持ちをわかってくれない」という子が10%でした。「特になし」という子は50%を切っていました。広島市の市教組が「ムカつきをなくすには」のアンケートをとったところによると、「受験戦争がなくなる」が、小学生では9%ですが、中学生では34%、高校生では31%の結果が出ています。

小学校教師の悩みは、「子どもに向き合う時間・余裕の不足」「子どもの家庭環境・社会背景など」「子どもが自己中心的、自分勝手など」「無気力・無関心・やる気なし」などが上位を占めています。

子どもは疲れている

文部省が12月発表した「子どもの体験活動調査」によると、特に運動もしないのに、疲れていると感じることが「良くある」か「時々ある」という子どもが、小学2年で3割を越え、中学2年では6割に達しました。同省少年教育課では「受験勉強や友人関係によるストレス、テレビゲームなどが影響しているのではないかと話しているということです。

子どもの体験細り・・・文部省

文部省の同調査では、乏しい自然・生活体験も発表しています。「太陽が昇るところや沈むところを見たことがありますか」の問いに、「ほとんどない」と答えた子が男子で34%、女子で36%にも上ったということです。毎日新聞は、この様子を「星の降る夜も予定に追われ、個室に逃げ込む子どもたち」と報じています。

(2) 鶴小の子どもと教育

子ども

和光鶴小でも、「子どもの疲れ」や「体験細り」「日常生活のストレス」は同じ状況にあると考えられます。しかし、「子どもの荒れ」といわれる現象とは質が違っているように思っています。それは、学校の教育活動を通した、子どもと教師、親と教師の関係づくりの土台が支えになっているからではないかと考えています。

しかし、一つ一つの学級や個々の教師の場面でとらえると、子どもをどう理解したらいいのか、親の声をどう受け止めたらいいのかと、一人一人の教師の抱えている重さは、現代を生きる教師として共通しています。私たちは、昨年度(97年度)の研究テーマを「子どもの表現を読みとり、ともに学び、生きる」にしました。夏の和光合宿で聞いた、京都の中井和夫先生の「崩壊学級からの再生」の実践報告は私たちに多くの教訓を与えました。子どもと真正面に向き合ってつくる実践の基本は「受け止め、要求し、待つ」ことにあったという、修羅場をくぐって得た結論でした。

子どもを真ん中に・・・教師と親・・・教師のストレス

10月、心理学者のY先生を招いて、「子どもを真ん中において、子どもをどうとらえどう指導するかをめぐって、親との関係で、教師のストレスは年々増大している。親の声をしっかり受け止めることの大事さはわかってるつもりだが、受け止めきれないことだってたくさんある。親をどう理解したらいいのか。」という職場に渦巻く教師の声を共に考える研究会を持ちました。「荒れ」とは言えないまでも、「子どもがおかしい」「子どもとかみ合わない」「親とはもっとかみ合わないことがある」という悩みを、鶴小の教師たちも持っています。子ども研究と親研究は教育実践の基本だと、私たちは考えています。

Y先生は、二人のお子さんを和光で育てられた方で、和光の内情も母親の目を通してご

存知なので、大変率直な思いを語っていただきました。最近出された著書の中に、事例の一つとして二人のお子さんを和光で育てた経験からの教訓を書いています。母親としては和光高校に当然進ませたいと考えていたのに、娘さんは和光中学から和光高校への進学を頑として拒否しました。母親と娘の価値観の争いがかなり続いたということです。「娘の方が正しいと思いながら押しつけてしまった私」と振り返り、親は娘の幸せのためというけれど、「だれが幸せに感じるのか」と「幸せの中身」を考えるべきだと書いています。

世の中の価値観と対峙して子育てのあり方を求める親たちの葛藤をご自身を例にしながら語ってくれました。教師たちは話を聞くだけでなく、具体的な親の理解の仕方、教育の共同の關係の作り方などの悩みをじっくり聞いていただきストレス克服の鍵を考えました。

(3)子どもの真の要求は「学びがい」

生活と教育の結びつきをつくり、何のために何を学ぶのかをつかめる学習を

子どもたちの問題をどのように受け止めたらよいのでしょうか。私たちは、これを学校や教師の問題として受け止めたいと考えています。教育や学校の現状を変えないで子どもの状況を「荒れ」というのは、子どもを真に見ていないことにつながるのではないのでしょうか。子どもたちの側にたって今を見たとき、「学ぶ意味や実感をつかみたい」と、どの子どもも新しい自分探しをしているといえるのではないのでしょうか。「子どもたちが何を学びたがっているのかをつかむこと」=「子どもたちと学ぶ喜びを共有すること」が教育改革の鍵ではないかと考えています。

今年も新しい実践が... 子どもたちに支えられて私たちの実践は進む

鶴小の実践づくりは、その学年の学習課題を原則的に合意した上で、具体的な題材については1年ごとに確かめながら発展させてきています。「確かめながら」とは、その実践展開が、子どもの学ぶ課題からも、学び方の課題からも、意味が深いかどうかを検討することです。

今年もまた、新しい実践が創られてきています。その実践創造を支えているのはいつも子どもたちです。3年生の総合学習は、鶴小のある地域をフィールドに、子どもたちの興味と関心を出発点にした地域学習を構想しています。鶴小の裏山が雑木林となっていることから、この間、里山の自然と人間の暮らしの特徴や変わりゆく地域の問題を3年生らしい視点でとらえることを目指してきました。子どもたちは地域に出かけ、そこで出会うたくさんの人たちから「地域と人間」を学ぶことができました。題材名としては、「雑木林」「柿」「炭」という題材=テーマの総合学習に取り組んできました。

今年の3年生は、鶴川小学校から山を一つ越えた川崎市の黒川地域を学習のフィールド

にしました。黒川地域は、これまでも、低学年の生き物名人たちが生き物を探しに出かけたり、3年生の社会科の題材としても取り上げたりしてきているとても魅力的なフィールドです。黒川地域は、営農団地として開発が進められているところなので、手を着けられていない自然が残されている貴重な地域です。しかし、回りの稲城市、多摩市、町田市の側から都市開発が進み、かろうじて自然が残されている地域とも言えます。黒川の農業、農家の人、暮らし、文化、自然など教材として取り上げたいことはいくらでもあります。3年生の先生たちは、子どもが何に関心を示し、こだわり始めるかつかみ、そこから実践の構想を立てようとしてきました。

2学期で3回の黒川探検を組みました。第1回は、黒川地域にある4つの沢を班探検で回りました。子どもたちは生き物取りに夢中になりました。きれいな水にすむホトケドジョウ、タイコウチやオケラなどを始め20種類を超える生き物を捕まえて帰ってきました。見付けたことを図鑑などで調べ、スケッチブックに絵や文にまとめました。各班の交流を通してさらにやってみたい課題を絞り、調べたい項目でグループ別の第2回探検をする事にしました。今度は、探検計画書づくりから始めます。生き物、草花、野山、川など11のグループができました。このグループでは、情報新聞づくりをして発表交流をしました。2回の探検を通して、『5つのなぞ』がまとめられていきました。

黒川の珍しい生き物は何で今はいないの

なぜ、ただの虫が珍しい虫になってしまうの

どうして黒川に仕事に来る人と黒川にいる人がいるんだろう

川はどっちから流れているんだろう

山が削られているところにどうして畳があるんだろう

そして、第3回目はこの五つのグループに分かれて探検し、その結果を報告しあいます。この中で、「川の部分がコンクリートで固められたために珍しい生き物がいなくなった。」とか、「畳の正体は、畳ではなくてわら芝だった。」「削った山が崩れないためだ。」などのことが見えてきます。この結果もまた、次の学習の出発です。コンクリートで固められた川＝用水路の問題、山をなぜ削るなど、黒川地域にある今日的な問題が3年生なりに見えていきます。

子どもたちは、彼らの学びたいこと、学んで意味あると感じられることに出会ったとき、教師の願いを越えて積極的な学習活動を展開します。今年の3年生もまた、新しい分野でその確信を教師に与えてくれているのです。これからの学力として「アクト・ローカリー、シンク・グローバリー」の知性が求められていますが、3年生の行っている以上のような学びの姿は、こうした現代的な課題に応えているように思います。

子どもたちの自分探しに応える学習を

8月23日、NHKの「ふるさと発ドキュメント」で、『授業・いのちを見つめる子どもたち』という番組が30分間放映がなされました。これは、鶴小6年生の「命の学習」をもとに死を考える授業を特集したものです。

昨年度、和光鶴小の6年生と、和光小の6年生のそれぞれ一つのクラスで、『死を考える授業』に取り組みました。それは、一人の童話作家からの、子どもたちに授業したいという申し込みを受けたことがきっかけでした。その方は、年齢27歳・女性、ふだんは会社勤めのOL、週に一回ホスピスでボランティアをし、その他の時間は童話創作にあてている人です。『ロン』というガンを患っている犬と拾ってきた少年との関わりを軸に物語が展開していく絵本を使って、子どもたちに授業したいというのです。

申し込みを受けたとき、総合学習「沖縄」を通して「命どう宝」を学ぶ和光の6年生が、どのように受け止めて彼ら自身の学習に生かしていくのか、とても重要なテーマだと考えました。小学生は人の生きざまを通して、学習対象を深く学び取るところがありますが、『死』というテーマを追い続ける若い女性の生き方にも和光の子どもたちはきっと深い関心を寄せると思いました。私は、彼女自身の体験の事実、こうした活動から学んだ教訓や願いを子どもたちに伝える授業が子どもたちに響くのではないかと話しました。

授業の結果は私たちの予想以上の成果でした。死を学ぶということは生きるということ学ぶことだということをもどの子も感じ取っていました。子どもたちは『授業の感想』の中に、自分自身の内側にある思いや将来への夢を綴りました。そして、沖縄学習旅行を経る中で、「沖縄戦での死」と「ホスピスでの死」の違いに着目するようになりました。そして、3学期には、担任の主體的な授業展開の中に部分的に登場してもらう形態での授業実践がつけられるようになりました。こうして子どもたちは、死の授業を通して、人としての尊厳の問題を学び取っていきました。

昨年度の実践を春の合宿研究会で検討する中で、今年度は、総合学習「沖縄」の年間計画の中に、トピック的に位置付けることになりました。NHK放映は、そういう経過の中で実践された今年の6年生を取材の中心にしています。6年生は、ホスピスでボランティアをしている方の体験やご主人をガンで亡くし、ご主人が病床で描いたコンピューター絵画の展示会を開いたり死別体験を子どもたちに語り続けている方の話を伺いました。

その授業を受けた子どもは死を学ぶことは生を学ぶことだということを実感を持って受け止めていきます。

「おばあちゃんが亡くなったあと、大人の会話から『ガン』ということを知った。『ガンで死んだの?』と聞いたとき、父親がきちんと伝えてくれなかった。なぜ、お父さんがそんな

な態度をとったのかモヤモヤしていた。北村さんの話を聞いて、お父さんの気持ちが少し分かった。」と語る男の子。

「やりたいことがあったり、もっと生きていたかった人もいる。僕たちは簡単に死ね死ねといっているけど、死という言葉はすごく重い。生きていることを大事にしなきゃいけない。」と語る男の子。

「僕が和光に合格して、初めての説明会の日に、お父さんは勤め先からバイクで説明会に向かう途中、交通事故で死んだという。お母さんは、一生懸命働いて僕を和光に通わせ続けてくれた。僕は、すごくお母さんに感謝している。」と、自分の死別体験をとつとつと語る男の子。

その後の生活ノートに、腎臓病で透析治療を続けている父親を今までは受け止めきれなかったけれど、この学習で、生きるために精一杯努力している父親をきちんと受け止められるようになったと書いてきた女の子。

・・・命と平和を考える学習は、子どもたちが生き方、人間関係を見直す場面につながっています。

今、子どもたちは何を学びたがっているのでしょうか。こうした問いを発すると、子どもたちが持ち込んだテーマでないと、教師の引き回しではないかと躊躇する雰囲気は昨今の教育現場にあるように思います。新学力観がでてからいっそうそうです。子どもと一緒にテーマを煮詰める授業づくりはとても大事なことだと考えています。しかし、私たちは、教師のとらえた課題を子どもたちにぶつけ、子どもとともに探究していく実践のあり方を放棄してはいけないと考えています。

6年生の教室を見ると、自分たちで知っておきたい自分たちの時代の「後世に残る大事件」が年表になって貼られています。第1位は「阪神大震災」、第2位は「サリン」、第3位は「酒鬼薔薇」となっています。今の時代が、子どもたちにとって展望のない不安に包まれた時代だということが歴然としています。今を生きる子どもたちは、それだけにいっそう学ぶ意味をつかみたがっているのです。子どもたちの学びの要求の深部には、こうした学ぶことと生きることを結ぶ学習要求があるのです。学校は、子どもたちの願いに真正面から応えなければならないと考えています。

3 中教審・教課審・新指導要領の問題点と私たちの課題

(1) 「総合的な学習」を私たちの創る「総合学習」に組み替える

6月22日、教育課程審議会は2002年からの学校五日制のための「新しい教育課程」を発表しました。今回の教育課程改訂では小中高校における「総合的な学習の時間」の導

入が大きな目玉となっています。小学校は年間105時間(週3時間)、中学校・高校は70時間から90時間(週2~3時間)となっています。11月19日、文部省は、教課審・中教審の答申を受け、小中学校の新しい指導要領に「総合的な学習の時間」設置することを発表しました。教科時間が削減される中での新しい「時間」の創設なので、その「時間」をどうとらえどう対応したら良いかについては、これからの学校と教育課程を考える上での焦点的な問題となっています。

ところで、総合学習は、日本の教育研究史において、今回初めて提起された学習分野ではありません。文部省よりも先に、民間の側が提言した学習分野です。1970年代に、梅根悟氏(元和光大学学長)を委員長とする日教組教育制度検討委員会の提言として、民間の側から提起された学習分野です。日教組提言では、「教科教育」「自治的文化的活動」とは別の教育分野として総合学習を提言しています。3つの分野(領域)それぞれの固有の教育を重視しつつ、相互の環流で生きる力と学ぶ力をともに育てる人間教育の必要性を提言しています。この提言には、戦前戦後を通して、地域に根ざし、子どもたちの生活現実と教育の関連を大事にした、日本の教育研究運動の成果が結実しているといってもいいのではないのでしょうか。

文部省の「総合的な学習の時間」は、弱点や問題点・危険性をたくさん含んでいます。「時間枠」だけを新設したものでしかありませんが、しかしそれでも「教科教育」と「自治的文化的活動」とは少し意味づけの異なる「時間」は現場に「新たな創造的な実践の可能性」を広げることになるのではないのでしょうか。私たちは、総合学習を通して子どもたちが学ぶ主体として人間的に育つこと目指しています。したがって、私たちは「総合的な学習の時間」の新設自体を否定する立場でなく、その問題点を批判しつつも、私たちの側から「子どもの人格形成につながる教育課程自主編成」運動に「総合学習」の創造を関連づけて、豊かな実践を開発して行くべきではないかと考えています。

(2)「総合的な学習の時間」の問題点と可能性

「総合的な学習の時間」は和光で取り組んできた「総合学習」とは似て非なる学習です。

第1は、なぜ「総合的な学習の時間」が必要なのかについてどうかかれているかを見つめることにします。まとめでは、「総合的な学習の時間」の創設の趣旨について、「特色のある教育活動を展開できるような時間の確保」と「社会の変化に主体的に対応できる資質や能力を育成するため」に「横断的・総合的な学習をより円滑に実施するための時間の確保」と、「時間の確保」をあげています。そして、この時間が「生きる力」を育むことをめざす今回の教育課程改革の趣旨を実現する上で重要な役割を果たすとしています。しかし、ここでは「教科の枠を超えた学習」の必要性や目的が明確にされていません。なぜ「教科」

でなく「教科の枠を超えて」なのかについての記述がありません。何のために何をどのように学ぶのかという、この学習の目的や性格がきちんと示されていません。「社会の変化に主体的に対応できる資質や能力」とは何でしょうか。財界の描いた21世紀構想に基づいた人づくりのための「資質や能力」ということが本音のようです。

総合学習は本来、「方法概念」でなく「目的概念」です。総合学習は、近代教育史の中で見ると、並列的専門教科の雑多な知識注入による学校教育に反発する学校改革運動の歴史の中で形成されてきました。

子どもたちは身の回りにある出来事に興味や関心、不安や疑問をたくさん持っています。そのこと自体が子どもたちの強い学習要求だといえます。子どもたちは教科の枠ではくれない学際的で総合的な課題を丸ごと学習対象にし、学校教育で得た総合的な力を駆使して主体的に問題解決に立ち向かいます。総合学習は学ぶことと生き方を統一的に学ぶ学習分野なのです。

第2は、この「時間」の学習内容についてです。「まとめ」では「国際理解・外国語教育」「情報」「環境」「福祉・健康」が例示されていますが、英会話とコンピュータと自然体験・福祉活動を学習内容論としてどうまとめるのでしょうか。雑多なものの寄せ集めの「時間」にしかならないのではないのでしょうか。「まとめ」には「国が各教科等のように内容を規定しないことが望ましいと考える。」と記述されていますが、ここで例示されている領域だけに現場実践が枠づけされる危険性があります。なぜ、例示が4領域なのでしょう。子どもたちとともに考えなければならない今日的な問題はもっと広くあります。「平和なき国際連帯」「身体を通して学ぶ課題を抜きにした情報教育」「公害抜きの環境教育」「人権抜きの福祉健康」と対比してみる4領域の例示の裏に隠されている権力側のねらいが見えてくるように思います。そもそも、「総合的な学習の時間」は、子どもたちの創造的で能動的な学習の時間が必要だと考える、子どもの側からの発想ではないということが見えてきます。

第3は、「子どもの学びと教師の指導性」に関わることです。「まとめ」は「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、よりよく問題を解決する」と、子ども主体の学習を強調しています。能動的な学習主体をめざしている点では私たちと共通しています。しかし、今日的な課題性を見据えない横断的で総合的な学習は活動主義に陥る危険があります。子どもの主体的な学びを何よりも大切にすることと、何のために何を子どもとともに問題にし、解決の道を考えることは矛盾しません。そこをつなぐところに教師の指導性が発揮されなければならないと考えます。仲間とともに、生き方につながる大事な課題をしっかりと学習したいという要求は、子ども自身の要求でもあるのです。

(3)和光鶴小の総合学習

和光鶴小の総合学習

和光鶴川小学校の総合学習は、3年生以上の学年で以下のような題材に取り組みます。

3年生・・・カイコから生糸まで、黒川（柿・炭）

4年生・・・鶴見川探検、館を訪ねて（町田の福祉施設）

5年生・・・本物を作る・食べる（「豆」、「ソーセージ」）、思春期の体と心

6年生・・・「沖縄」、在校生に伝える私の一冊本

総合学習で育った卒業生の残した一冊本

昨年度は和光鶴小の第一回沖縄学習旅行でした。学習旅行の4日間は、以下のようになっています。

1日目・・・宜野湾小学校6年生との交流、読谷村（ゾウの檻）・嘉手納基地の見学、学級集会

2日目・・・南部戦跡（ひめゆりの宮城喜久子さんの証言コース、ずいせんの宮城已知子さんの証言コース）、ひめゆり平和祈念資料館見学、平和の礎での平和集会、ひめゆりの宮良ルリ先生の講演

3日目・・・渡嘉敷島へ（金城重明先生の講演を聞いて集団「自決」を考える。とかしくビーチでの水泳研修）

学級集会。

4日目・・・首里見学、国際通りでショッピング

学習旅行の4日間は、総合学習「沖縄」の中心となります。この旅行までの学習と旅行を終えてからの学習全体を総合学習「沖縄」といっています。

1学期、子どもたちはオリエンテーションを受けた後、彼らの興味や関心から沖縄に近づいていきます。沖縄料理をつくったり、焼き物を焼いたり、調べ学習をしたりします。秋祭りにはエイサーを踊るので、踊りの練習をしたり、三線を練習したりして本土とは違う沖縄文化と触れていきます。一方社会科の時間を使って戦後の日本を学びます。親から「あなたの人生で子どもたちに伝えてほしい歴史的な出来事」を募集します。東京オリンピック、アポロ、安保、ベトナム戦争などの親から提起されたテーマを子どもたちは分担して調べ発表し学習します。同じように子ども自身に「私たちが考える私たちの時代の歴史的な出来事」を出させます。昨年度の6年生は、第1位オウム・サリン事件、第2位阪神大震災、第3位消費税5%アップと続きました。子どもたちが知りたいこと考えてみたいことが並びます。こうやって並べて思うのは、今の子どもたちの時代がいかに不安に満ち、将来への希望がなかなかもてない時代であることです。そして、子どもたちはその中であっても、自分たちの時代と未来を切り開いていきたいと切に願っているということ

です。

2学期、基地学習や15年戦争の学習をへて子どもたちは沖縄へ行きます。基地のこと戦争のこと命のこと海のこと等、子どもたちはそれまで描いた受け止め方を実際の現地体験の中でとらえ返し、深めてきます。

「私は沖縄へ行って、沖縄に対する考え方が、なんかすっごくかわったような気がします。沖縄に行く前は、なんていうか、沖縄に行った後より深く考えていなかったと思います。命どう宝もそう。沖縄に行く前は当たり前じゃんとあっさりかんがえていました。でも沖縄に行ったら、その意味を深く理解できたと思います。

私は沖縄に行って、これほどまで一と驚いたのが、沖縄の基地のこと。空港を出て、バスに乗ったら、周りは両方ともずうっと基地・基地・基地・基地。・・・略

私は、自決のことに驚きました。沖縄では自決をして死んだ人がたくさんいます。最初私はなぜと思いました。『一つしかない私の命。なぜ、自分から自決するのか。』と思いました。子どもや赤ちゃんは「死にたいよ。」とかいうと思いますか。言わなくても、その子の親が殺すのです。その親は次に自分で自決します。怖いと思います。米軍に殺されるのではなく、自決するのです。これを聞いて思いました。『沖縄戦は、こんなに生きているのがいやになるんだ。でも、そう思って自決する人もいるかもしれないけれど、米軍の捕虜になり残酷に殺されるより自決した方がいいと思って自決した人もいる・・・』私は、こんな考えを持ってしまう戦争はしたくない。地獄みたいな毎日はイヤだと思う。私は2日目、壕の中に実際に入ったとき、自決した人の気持ちを考えました。もし私が日本兵だとし、けがを負い、壕の中暮らしたら・・・壕の中、ウジや血やおしこの臭い。傷にはウジがわき、肉を食べる音がする。他の日本兵のうめき声、水は飲めない、食べ物は十分食べれない。もしかしたら手や足を切断するかもしれない。・・・私だったら、もうこんなところにいたくないと思って自決してしまっているか、その時、死ぬのは怖いけどもうイヤと思って、曖昧なところにいるかもしれない。・・・と深く考えました。そんなこと考えってしまう戦争は絶対イヤです。・・・略

私は、沖縄に行って命どう宝を一番勉強しました。最初は当たり前と思っていました。私は、勉強して(深く命どう宝を考えて)、当たり前かもしれないけれど、(なんと云ったらいいのかなあ)深く考え、体験すれば(本当の戦争のような)自然と心に残ることかな。うまく口から出せないけれど、ちゃんと命どう宝の意味が、入っています。自分では分かっているんだけど、これからの授業や自分で沖縄を考えていき、自分の口から出せるようにしたい。・・・略」

そして、3学期。6年生は総合学習のまとめとして、在校生に伝える私の一冊本に取り

組みました。この実践は、一人一人のテーマを絞るプロセスをていねいに仕込まれています。一人のテーマを決めるのに、個人の関心から、先生からの要望、そして仲間からの期待と三つの声を重ねています。その上で、一人一人の調査と一冊本作成の作業が開始されます。時々中間発表しながら、一人一人の学習が深まるように交流していきました。沖縄料理のレシピをつくった子もいれば、楽しい沖縄をまとめた子もいれば、厚木基地を調べた子もいます。もちろん、沖縄に関係しないテーマに取り組んだ子もいます。この学習は、まさに、一人一人の力を総合して取り組んだ学習となりました。今、一冊本は図書館の書棚に並んでいて、バーコードも貼られ他の図書と同じ扱いを受けています。こんな形で、一冊本が代々残されていくとしたら、子どもたち自身がつくる和光鶴小の文化として貴重な財産になると考えています。

和光の総合学習の考え方

『総合学習ってなあに？』・・・今まで、日本の学校には総合学習の時間は時間割にありませんから、何をやっているか分かっていても、それでも「総合学習ってなあに？」と思われる方が多いのではないかと思います。和光では国語・算数・社会・理科・音楽・美術・体育・工作技術などの教科教育とは別の教育分野として総合学習の時間を時間割の中に組み込んでいます。学校教育を「教科教育」と「総合学習」と「行事や自治的文化的活動」の三分野で進めているのです。教科教育の学習だけでもいっぱいあるのに、何で総合学習の時間が必要なのでしょう。ここでは、総合学習の必要性を説いた教育思想がどのようにして発生し、和光がどのようにしてそれを取り入れてきたかを語ることにします。

『総合学習の考え方』・・・総合学習の考え方は、子どもたちの生活現実とかけ離れた知識詰め込み学校を批判し、学ぶことと生きることが統一される学校を目指す教育運動の中で国際的に形成されてきた教育思想です。日本においては、戦前、国定教科書よりも子どもたちの生活にこそ真実の教育課題があると主張した生活教育者たちの、そして戦後においては貧しい山村で「どうしたら貧乏から脱出できるか」を生徒と教師が真剣に考えた実践のような、生活と教育を結び学ぶことが生きる力につながる教育実践を継承しています。

近代学校は教科教育による確かな認識を育てることによって人格を形成する役割と学校行事や自治文化的な活動で生活を通して人格を陶冶する役割を持っています。ところが、教科教育中心の学校では、子どもたちが生活の中でとらえた問題を臨機応変に取り上げるわけにはいきません。どうしても知識の伝達が中心になって、知ることと生きることを統一して学ぶことができないという弱点を持たざるをえません。この弱点を克服する教育分野として『総合学習』の時間が構想されたわけです。

『和光の総合学習の草創期』・・・和光学園では1975年から、「低学年総合」「総合学

習ヒロシマ」の時間として始めました。「低学年総合の時間」というのは今の生活勉強の始まりで、「総合学習ヒロシマ」は、当時の6年生の広島学習旅行に向けての特別授業の総称です。当時は、高度成長のつけとして工場公害・食品・薬害などの複合汚染の問題やベトナム戦争など、人間として生きていく上で切実な課題が明確になっていた時代です。また教育の世界では受験競争がいつそう激烈になり、落ちこぼれ・非行・校内暴力などが社会問題となっていました。和光は、こうした中で、学ぶ力を生きる力に転化する総合学習の実践の第一歩を踏み出したのです。学ぶことと生きることを結ぶ教育で教育荒廃が克服できると考えたのです。

『総合学習で育つ子どもに確信を持った時代』・・・1985年、和光小学校は3年生以上の学年すべてに「総合学習の時間」を設定しました。それは、教科教育での「確かな学力」形成の課題と、学ぶことと生きることを丸ごと追求する総合学習が相互に還流することで、子どもたちが学ぶ主体しに成長していくと考えたからです。私たちは「和光の総合学習」の目的・性格・内容などの構造を明確にして取り組みを開始しました。総合学習の目的と内容は、人間として生きていく上で切実な今日的な課題を、身近な問題から本質的な問題へと迫って行く学習としました。そして、学習の方法は問題解決的で分析的総合的な学習としました。和光鶴川小学校は、こうした歴史を背景に、鶴小独自の計画をつくりました。開校以来取り組んできた課題は以下の通りです。3年生で「カイコ」「雑木林」「柿」「黒川」、4年生で「多摩川」「鶴見川」「たんぼ」「町田の福祉施設」、5年生で「食を通して見える世界」・米・そば・豆腐・豆・ソーセージ、「思春期の体と心」、6年生で「沖縄」「在校生に伝える私の一冊本」などです。

『総合学習で育つ力と評価』・・・ 総合学習の目的は、現実生活の中に今日的な課題をとらえ、仲間とともに問題解決の主人公となって能動的探求的に学び、主権者としての自覚を深め、自立した市民を育てることにあります。私たちの生活現実の中にある今日的な課題とは何でしょう。現代は、「人間の尊厳」「平和の希求」「自然と人類の共存」など地球人類が共に生き続ける知性や力が求められています。大切なことは、子ども自身が大人と共にこうした問題状況の中にながらその問題を認識し、そこから自分の生き方なり方向性なりを追求する知性をもつかどうかです。「鶴見川」「食」「沖縄」など子どもたちが取り組むその課題は、人間が自然や社会や人間自身と共存していく知性の形成につながるのです。こうした、「生き方なり、生きる方向性と追求する」学習は、「分かった・分からない」「できた・できない」を明確にして指導課題を持つ教科教育とは性質を異にしています。教育活動には評価はつきものですから、総合学習でも教師は子どもの学習の状況の評価して励ましたり課題を与えたりしています。しかし、子どもの人格形成に関わることは

評価カード（通信簿）の「評定」にはなじまないと考えています。

(4)今年の実践の特徴と分科会

今回の公開研では、生活勉強と総合学習に関わって三つの分科会を用意しました。

低学年は、生活勉強です。和光の生活勉強は子どもたちの現実生活を学習対象にし、見たり聞いたりつくったりする実体験を重視して事実認識の芽を育てる学習です。生活現実から日本の今日的な問題を考えるような中高学年の総合学習と目的や内容を異にしていることから、『生活勉強』と呼んでいます。この学習では、子どもたちが身の回りの生活から学校に持ち込む題材を共同の学習材として子どもたちの知性を開いています。分科会でも発表されるように、担当が毎日毎日記録をしていくと、子どもたちが持ち込んだ題材は1学期だけでもたくさんあります。この学習は、身の回りに関心を持ち豊かに関わる人格を育てるうえで意義深いものだと感じています。一人一人の興味の交流は、お互いに影響しあって、それまで関心も示さなかった新しい世界を開くときがあります。この学習は豊かな生活に気づくと同時に、生活を豊かにするきっかけにもなる学習です。さらに生活勉強は、教師のプランを土台に、子どもたちと共に生活文化を学び豊かにする学習でもあります。今年の1年生は、秋祭りに踊る「アイヌの踊り」を節目にしてマタンブシの刺繍、歌、自然の捉え方などを学習しました。是非分科会で検討していただきたいと思います。

中学年は4年生の総合学習「鶴見川」を報告します。町田市に源流を発する鶴見川は、全長42キロほどの都市河川です。源流域を出るとすぐに生活排水が流れ込み、川の汚染度は日本のワースト3にはいる川です。それだけに、鶴見川に関わる自然保護団体も多く、子どもたちは学習のプロセスでたくさんのすてきな大人たちに出会い学びます。私は、河口見学の引率を手伝いました。葉っぱのついた木の枝を川に2から3日浸けておいて、そこに集まった小魚やエビを捕るボサ漁の実演を見せてもらいました。このおじさんたちは、ボサ漁をしながらその日とれた数を長年記録し続けています。そのデータから鶴見川の課題をとらえようとしているのです。少年少女期にふさわしい探検学習の姿を是非検討していただきたいと思います。

高学年は、「本物を作る・食べる『豆』」の学習を報告します。この実践は、「食の問題から今日的な事を考える学習」と条件を示したうえで子どもたちに食材を選ばせる学習活動から入りました。焦点になったのは「そば」、「ゼリー」、「豆腐」等でした。子どもたちは、自分たちの選んだ食材がいかに意味深いか、そしてみんなでやれる可能性があるか実際につくって競いました。その上で、豆腐が決定されていきます。この分科会では、「食と教育」と同時に「子どもとつくる学習テーマ」ということでも検討を深めていただきたいと思っています。

4、今、授業をどうするか・・・手作りの算数教育

(1)授業改革の視点

「算数嫌い」の増加はもう10年以上前から話題になっています。1992年から現行の指導要領・教科書が始まりましたが、以前よりもますます過密になって、悲鳴を上げる子が多数生み出されました。算数だけでなくすべての教科内容が雑多で過密という点では共通の問題を持っていました。いじめ、自殺、不登校・登校拒否、校内暴力、果ては殺人と、子どもたちの中で何でもありの状況がつくられてきました。

文部省は一定の手直しました。「新学力観」という耳新しい造語でした。その内容は、指導要領や教科書の内容を変えないで、知識よりも興味・関心・意欲、思考力・判断力の育成の強調でした。「みんなが同じことをわからなくても良い」という一見、個性を重視するかのような言葉の陰で、「できない」「わからない」「つまらない」子が放置されました。

「ムカツク・キレル」といわれる昨今の子どもたちを見ていて一番心を痛めることは、「聞かない・聞けない・聞こうとしない」「話さない・話せない・話そうとしない」「書かない・書けない・書こうとしない」「考えない・考えられない・考えようとしていない」と、学びの世界に背を向けている子どもたちです。これは考えることを拒否しているということです。わかりたい、知りたい、考えたいという人間性の特質だと言われていますが、今の子どもたちは、その人間性が危機状態に陥っていると言えないでしょうか。追いつめられた子どもたちの反撃が始まっているとも言えるでしょう。

算数を教える目的は何でしょうか。学ぶことを通して、現実生活と算数数学のつながりをつかみ、人間の知恵のすばらしさに感動し、自分の暮らしや生き方に算数や数学の見方を反映していける人間を育てることではないでしょうか。私は今、わかりたい・知りたい・考えたいという人間本来の特質に依拠した学びの世界を子どもとともに創ることが求められているのではないかと考えています。現代の子どもたちは、何のために何を学ぶかが見えなくなっています。算数数学教育の問題点は、パターン化した形式伝達重視の教育と、

間違い蔑視・正答主義の教育にあります。与えられた問題を解く力が『学力』とされ、結果としての正解量が問われるので、教師の指導はどうしても解く方法の「教え」と解き方の習熟をはかる訓練に走ります。そこから脱却することが必要です。子どもの生活から出発し、文化としての算数数学を求める授業づくりが必要ではないかと考えています。

(2)新指導要領の検討

教育課程審議会の答申で、教科内容の「厳選」方針が打ち出されました。厳選の視点は、「単なる知識の伝達や暗記」「行き過ぎになりやすい項目」「学年間で重複しているもの」

「学校でなくとも身に付く項目」「各教科間で重複する」ということでした。現行のカリキュラムの削減(スリム化)だけで算数教育改革ができるのかという疑問を持っていました。新指導要領を見ると、その不安は杞憂ではないことが感じられます。「つまらない」「わからない」「役立たない」が算数嫌いの3要素だと、教課審委員の一人は言っています。その通りだと思います。果たして、新指導要領からそれが読みとれるでしょうか。現行内容の3割削減といっています。今示されている内容を見ていくと、加減を2位数で終わらせたり、小数を第1位までしか扱わなかったりと、子どもたちが認識を一般化するうえで重要になるポイントが外されていたり、逆に、スパイラル方式が克服されていないため無駄な教材がたくさん残っているなど、大変問題点の多い『厳選』になっています。

(3)和光の「学びの改革」と今年の課題

和光では、算数教育の目的を「現実世界を数の世界に置き換えて解釈し解明する」力を育てることだと考えています。そして、「子どものやる気を引き出す」算数の授業をつくりのポイントを以下のように整理してきました。子どもから出発し子どもに学ぶ、子どもの生活から出発する、分かることの追求=文化としての算数数学、 やってみる算数、 討論の重視で学び合い育ちあう、子どもの自己形成を励ます評価をの6つです。

今年、こうした到達点にたち、さらに昨今の子ども分析をふまえて、改めて実践研究課題を持ちました。それは、【内容論】では「数や数式(算数のことば)の実感を問うこと」であり、【方法論】では子どもの疑問や問いを大切に、それを柔軟に組み入れ、子どもたちの力で解き明かされるような展開をつくることだといえます。さらに、ここ数年追求してきている内容論と方法論を丸ごと含み込んだ、【現実世界の中で学んだ概念を生かす】授業づくりも課題としました。

バーチャルリアリティーの中で育つ子たちは、何のために何を学ぶかが見えなくなっています。これは算数数学の世界でも同じです。現在の算数数学教育の問題点は、パターン化した形式伝達重視の教育と、間違い蔑視・正答主義の教育にあります。与えられた問題を解く力が『学力』され、結果としての正解量が問われるので、教師の指導はどうしても解く方法の「教え」と解き方の習熟をはかる訓練に走りがちです。そこからの脱却をはかりたいと思います。それは ことば(数や数式)の実感にこだわる指導であり、子どもの発想や間違いの中にある真理探究の糸口を大事にする子どもとともに創る授業の実践だと考えています。

(4)見えてきたもの

実感を問う

1年生は、5の概念をどのようにつくるか重視しました。5の缶詰タイトルを『ごうたる

う』と名付けて、それを作るプロセスから大事にしました。

2年生は、3桁の引き算の授業を子どもの作った問題を生かして授業しました。

3年生は、わり算の導入を授業研究会で提起しました。子どもがわり算の場面を生活現実の中でつかむことを重視しました。秋祭りの時、「先生！ぼくすごく良いこと発見しちゃった。142÷2の答えは71だよ。スライムがね142個できて、2つに分けるのに計算しようとしたら九九ではできなかった。しょうがないからスライムを10の束ずつ全部並べていってふたつに分けたら71あったから、何とか142÷2=71になる立て計算考えたらわかっちゃった」と誇らしげに話していた子がいたといいます。

どの学年も、パターン認識に走るよりも、実感を問うことによって子どもたちの学習へのたち向かい方の違いをつくることに力点を置いていました。

体験して学ぶことの意義

認識の実感を問う課題は、低学年だけでなく高学年も同じです。

5年生のM子は体積の学習が終わったとき次のような感想を書きました。

「私が一番楽しかったのは、昨日プールの水で自分の体積をはかった。プールにも入った。とても楽しかった。私は最初水で体積をはかると重さになってしまうかと思った。でもそうじゃなかった。先生が計りではかってくれたら重くても体積が分かる、ってことが分かった。」

M子は、クラスの中でもずうっと体積と重さを混同していた子です。

体積はものがある限り存在する実在量です。時間や速度の量とは違い、目の前にあるものの大きさを表す量です。とらえやすい量と思われがちですが、実はとらえにくい量なのです。ものの大きさといっても、重さなのか、長さなのか、表面積なのかかさなのか混同する概念です。また、温度の変化や圧力によって体積は増えたり減ったりしますからなおさらやっかいになります。算数では温度や圧力による変化までを対象にはしませんが、それでも、体積の学習では、子どもが体積を求める公式を覚えるよりも体積そのものの概念を持てるようになることが大切だと考えています。

5年生は、実際に小麦粉粘土をつくって大きさ比べをしたり、いろんなものの体積を水に置き換えてはかったりして体積の概念を作っていました。まとめの作文には、どの子もM子のように、実際にいろんなものの体積をはかったこと、いろんなものの体積がわかったことが一番楽しい学習だったと書いています。学んだことでいろんなことが見えてくるところにおもしろさがあるようです。

授業で熊の人形と石をの大きさをどうやって比べるかを考えました。「見た目」「定規で測る」「水に入れてあふれた量で量る」「金槌で粉々に砕いて比べる」など予想を出した上

で、水に入れてあふれた量で比べました。A子は「あれだけじゃはかれないと思う。だって体積は大きいけれど軽いものと比べて、体積は小さいけれど重いものをはかったら体積は小さいけれど重いものの方がたくさん水があふれるじゃん。」と感想を書きました。M子も同じように混同していました。子どもたちが納得するには、同体積で重さの違う円柱を実際に水に置き換えてはかったり、同じ重さで違う大きさの円柱を水に置き換えてはかる授業がもう1時間必要でした。その後、文房具の体積をはかったり、手や足などの体の一部を測って体積を実感しました。1立方メートルには8人の子が入ることができその大きさに子どもたちは大変驚きました。最後に自分たちの体を90リットルのポリバケツに入れて測りました。その結果が、発育測定の体重とほぼ同じことに子どもたちはびっくりしていたといいます。

子どもがつくる授業

私たちは、今まで学び取った概念で生活をとらえ直す授業が、子どもたちの算数観を変えろという実感を持っていました。6年生の単位あたり量の授業では、学んだ単位あたり量の概念を通して自然や社会をとらえる学習活動を重視していました。今年の6年生は、それをいっそう進めました。混み具合や密度、速度、濃度などの概念をとらえた後、子どもたちの研究グループを12こ作ってそれぞれの調査活動を始めました。子どもたちが作ったグループは、速度、混み具合、命中率、濃度などでした。「粉末ジュースを溶かして濃度の問題を解いている」「ゴミ箱に紙で作ったゴミを投げ入れて命中率を出している」「ほふく前進や後ろ走りの速度を調べる」「インターネットでアトランタオリンピックの記録を調べ、その記録を使って速度の問題を作る」「走る速さとローラースケートの速さを比べる」などなど・・・子どもたちは、彼らのやってみたいことを実際に測って調べました。授業では、グループごとに自分たちの調べたことを発表します。発表が終わると、グループが作った問題をつかって子どもたちの進める授業が始まります。

陸上選手の世界記録保持者が東京から大阪までの新幹線の線路上を走るとしたら何時間かかるか。線路は550キロメートル。100m走の世界記録は9秒84(ペーリー)、200m走の世界記録は19.32秒(ジョンソン)

6年生の先生たちは、この授業は、子どもたちに好評だったとまとめている。私たちも授業研究会で実際の授業を見たが、子どもから出された質問に、実に的確に答える子どもの姿が印象的でした。こうした子どもが作る授業は今後とも多様に試されるべきだと考えています。

(5)、分科会で深めてほしいこと

算数分科会では、2年生のかけ算を報告します。2年生の先生たちは、タイルとカップ

のかけ算の場面をキューブを使って繁雑さを克服したりするなどして、具体と抽象を結ぶ教具の工夫を進めたりしました。この分科会では、子どもたちの異変が低学年から始まっているといわれている昨今の状況をふまえ、授業を通して、今時の子どもたちとどうかみ合っていたらいいのかを深めていただきたいと思います。

5 , おわりに

一年間で一番寒い時期に、和光鶴小までおいいただきほんとうにありがとうございました。私たちは、この公開研を通して、以下の課題研究が少しでも前進できれば幸せだと思っています。

子どもの学びの要求に応じて学校はどう変わらなければならないか

子どもは何を学びたがっているか

総合学習の可能性

今日的な課題に迫る学習の意義

教科教育の改革とは

基礎基本の教育 = 学ぶ意味がつかめる授業

よろしく、ご指導くださいますようお願いいたします。